

## 「海邦養秀」「震天動地」次代を拓く逞しい人材の育成を目指して

沖縄の古典『おもろさうし』は、首里王府によって、1531年に第1回結集事業が行われ、尚豊王の即位三年、1623年に全22巻、総数1554首が成立しました。王府賛美、王権確立、宗教集権、歴史、文学、言語、民俗等の研究には欠くことのできないものであります。今回、天体を謡ったオモロとして有名な十巻534番オモロを紹介し、「学びの指針」について考えてみたいと思います。

一 ゑ、け、あがる、三日月や、	ああ 上がる三日月は
又 ゑ、け、かみぎや、かなまゆみ	ああ 神の弓（のようだ）
又 ゑ、け、あがる、あかぼしや	ああ 上がるあか星は
又 ゑ、け、かみぎや、かなままき	ああ 神の矢（のようだ）
又 ゑ、け、あがる、ぼれぼしや	ああ 上がる群れ星は
又 ゑ、け、かみが、さしくせ	ああ 神の櫛（のようだ）
又 ゑ、け、あがる、のちぐもは	ああ 上がるのち雲は
又 ゑ、け、かみが、まなききおび	ああ 神の帯（のようだ）

私がまだ若かりし頃、沖縄県立芸術大学で毎週金曜日に開催されていた、おもろ研究会の末席で上記オモロの解釈に接した時の衝撃は凄まじかった。研究の深奥や詩的創造に絶句の連続でした。解釈のいくつかを紹介したいと思います。

「古琉球の先人達は、夜空の天体を観て、覚えぬ感動の声を発し、その美しさの根源なる神を賛美した」と。「航海の人々が、ふと見上げる、たそがれの空に、三日月の、あがるのを観て、宵の明星、星群、紫の横雲を次々と、神の装いにかけてうたいあげたもの」と。「漆黒の空に神の弓矢を、神の櫛を、神の帯を観て賛嘆する。しかし同時に航海人達の眼は、そこに神の愛用する美しい帯を現に観ている」と。「ここに形容された『神』は人間的容姿をもった神、さらに言えば航海の安全を守護する神女である」と。自身の浅学さにどうしようもなかった事が今でも忘れられません。

衝撃から月日は経ち、令和8年4月1日から県下随一の伝統校である首里高等学校の校長職を拝命し、首里高生諸君に学びの大切さや大学進学等に向けての教育環境整備に腐心していこうとしています。皆様は上記のオモロに接した時、その壮大さや荘厳さをどのように感受するのだろうか？ 首里高校という学び舎（船）で、生徒達は日々新たな知識・教養等を身に付け、自身の進むべき指針を立てているだろうか？そして、我々は生徒達にどう立てさせているのだろうか？進むべき指針は、壮大でオモロ人達のように希有のイメージであろうか？

日々継続する学びの道（航海）は、尽きることは無いと私は考えています。穏やかな日々もあれば、何をやっても上手くいかない日々もあろうかと思えます。その際、学習者（首里高生）を守護してくれるのは何だろうか？ 航海安全の神女だろうか？ 神の弓矢か？ 神の櫛か？ 神の帯か？ 私が幻視（イメージ）する「神の弓矢は、全ての基盤となる知識・技能」、「神の櫛は、知識・技能を基盤として育成される思考力・判断力・表現力」、「神の帯は、探究の学びを通じた課題解決力」だと想起しています。それこそ学びの守護者ではないだろうか？ 未来を拓く首里高生には小さくまとまって欲しくは無い。これまでに誰も思い描いたことの無い創造力で自分自身の「学びの指針」を堅持して欲しいと思う。未来社会の創造者たる首里高生をイメージし、我々教職員そして養秀同窓会の皆様と共に手を携え協力していかなければならないと強く考えております。我々が共に手を携え、生徒達を鍛え上げた時こそ、首里高生の「学びの指針」は明確となり、次代を拓く、知性と品性を備えた逞しい人材となる事でしょう。「学びの勝者となる首里高生」の為、共に頑張つて参りましょう！

最後になりましたが、養秀同窓会には毎年物心両面にわたり多大なるご支援を賜り衷心より感謝申し上げます。今後ともご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。